

人工透析の患者が終末期を迎えたとき、透析をいつまで続けるか。日本透析医学会は11月、本人の意思が明らかでない場合は透析を見合わせるよりも選択肢とする提言を発表した。同学会の理事を12年にわたって務めた土谷総合病院（広島市中区）の川西秀樹副院長は、終末期の人工透析について聞いた。

（平井敦子）

## 終末期の人工透析

人工透析の患者は終末期に、透析を続けるかどうかの選択を迫られることがあるのです。

人工透析は、糖尿病腎症や慢性腎炎、腎硬化症などが原因で腎不全となり、体内の老廃物を除去する腎臓の働きが不十分となったとき、血液をきれいにするために行います。

患者のほとんどは「維持血液透析」として、腕に刺した針から血液を体の外に循環させ、腎臓の代わりにする人工透析機（透析器）に通じてきれいにし、再び体内に戻す方法をとっています。医療機関で週1回、4時間以上の透析が必要で、この透析はじめてしまうと、透析で除去されてきた老廃物が体内にたまって尿毒症となり、意識喪失などを来し、2週間程度で死亡に至ります。ですから透析患者が、がんや脳出血、脳梗塞、心筋梗塞、感染症などで命

に、透析の見合わせの検討が必要となる場合があります。

に、透析をいつまで続けるか。終末期を迎えたときにも、透析を続ける必要はありません。

しかし、日本透析医学会の提言で明記しているように、終末期には透析を行うことがかえって「く」なるのを早めてしまうことがあります。

具体的には、脳出血や脳梗塞で倒れて意識不明になったとき、がんや糖尿病で死が迫っているとき、胃ろうなどの人工栄養

透析は短時間で血液をろ過にきれいにし、水分も除去するため血圧が下がります。終末期に血圧が下がり過ぎると心停止を来す場合があるのです。

また、せん妄の症状などで患者が動いて腕に刺した針が抜けてしまい、失血したり、空気が血中に入ったりすると、たとえそれが微量であっても終末期には体への負担が大きくなり、くることがあります。

つまり命の危険があるために、透析の見合わせの検討が必要となる場合があります。

# 続けるか 患者の意思尊重

「ほかにも見合わせるの検討が必要か」があります。

提言では、終末期で患者の体の状態が極めて良くないときに、患者自身の意思がはっきり示されているとき、または家族が患者の意思を推定・代弁できるような見合わせを検討するとしています。

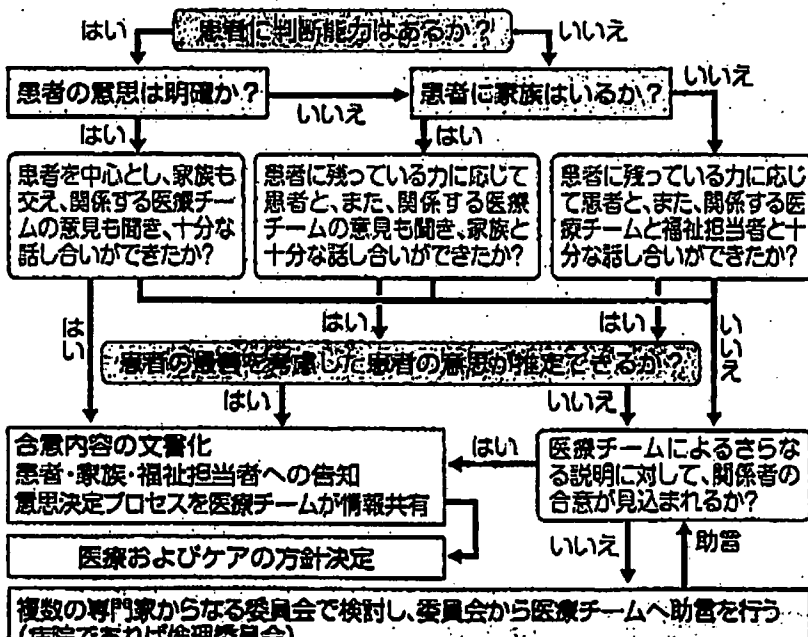
具体的には、脳出血や脳梗塞で倒れて意識不明になったとき、がんや糖尿病で死が迫っているとき、胃ろうなどの人工栄養

を長期間続けることが難しいとされています。

これは、透析そのものが命の危険につながるわけではないけれども、尊厳のある終末期を望む本人の意思を尊重し、あえて透析をしないという選択といえるでしょう。

患者の意思はどのように確認するのですか。

終末期に意識がはっきりしていればよいのですが、意識のない方も少なくありません。認知



\*日本透析医学会雑誌2014年47巻269-285ページから

人工透析（維持血液透析）見合わせ時の意思決定プロセス

症で判断能力がなくなってもあります。

「事前指示書」は、透析の見合わせに関する「事前指示書」を作る権利が患者にあることを示しています。

この事前指示書は例えば「永続的な意識状態」「意識が脳機能障害」「余命幾ばいもない」「苦痛の多い末期がんの状態」になったとき「透析を見合わせたい」という自分の考えを示しておく文書のことです。

「もし、事前指示書を準備するならば、このタイミングがよいだろうか。」

全国の透析患者は31万人を超えました。平均年齢は71歳で高齢化が進んでおり、また透析患者はほかの病気になるリスクが高い面もあります。透析を始めて体調が上向いたときに、将来のことを考え、家族と話し合っておくことがよいでしょう。

透析の見合わせはすでに続けたいのか、見合わせを希望するのか。患者の管がんの自己決定を尊重すること、終末期の人工透析で非常に重要と考えられています。